

あやなんがいく



Ayanan goes

NPO 法人 あいアイ

あいアイ美術館

埼玉県川越市

作品のモチーフを観察して
実感することから始める
創作活動に打ち込む
「小さな画伯たち」のアトリエ

障がいのある人たちのアート制作を支援しているNPO(特定非営利活動)法人あいアイが運営する「あいアイ美術館」が埼玉県川越市にあります。

この美術館には障がいのある人たちが創作活動ができるアトリエも併設されていて、同所では「あいアイ」の代表でもある粟田千恵子さんの指導の下、創作に打ち込む障がいのある人たちの姿がありました。

以前に一般財団法人メルディアと本誌が共催したアート展「BORDERLESS」でアートディレクターを務めた入澤日彩子さんと「あいアイ美術館」訪ねて、創作活動の様子などを見学させていただきました。



あいアイ美術館





AKB48 チームA
篠崎 彩奈
 しのざき あやな

**体験と観察から全てが始まる
 創作活動に励む作家さんたち**

篠崎 美術館の外でプリンターに植えられていた
 稲を刈っていましたが、あれは何ですか？

栗田 あれは、後に「お供え」としても使いますが、
 今日自分たちで刈った稲をモチーフにした作品
 を描いてもらおうと思いました。

入澤 栗田さんが編み出した独自の指導法として
 絵のモチーフとなるものを「じっくりと観察させて
 体で実感してもらってから創作活動に打ち込ませ
 る」というのがあって、その実践を兼ねているんで
 すよね？

栗田 そうです。何かを体験することや、事象を
 じっくりと観察することで、まずはそれらに興味を
 持つてもらうことから始めます。

篠崎 東京都内での活動が始まりだと聞いていま
 す。現在ではいくつかの活動拠点があるようで
 す。何人くらいが創作活動をしているのですか？

栗田 ここ(川越)が20人くらい、他の拠点も合わせ
 ると全部で100人くらいをお預かりしている
 と思います。

篠崎 障がいのある子どもたちの創作活動を支援
 するようになったきっかけは何ですか？

栗田 数十年前に自閉症の子どもをお預かりした
 のが最初でした。後にその子は自閉症が改善して
 普通学級に通えるようになったんですね。その辺り
 から、お母さんたちからの依頼が増えて、障がいの
 ある子どもたちをお預かりすることが多くなって、
 今に至るという感じですか。

篠崎 そうでしたか。子どもたちが創作活動をす
 るようになると、どのような変化があつて、どんな
 効果が表れるようになるんですか？

栗田 例えば、私たちがお預かりするまでは、ほと
 んど喋ることがなかった子どもが、自発的に喋るよ
 うになったりだとか、自律的に何かができるよう
 になっていきます。そうになると、学校で授業を受け
 る時なんか、一生懸命に先生の話を聞いて授業の内
 容を精一杯理解しようとする傾向が出てくるんで
 す。確実に成長が見られるというか、改善に向かう
 という例が多くありました。



あいアイ美術館
 (NPO 法人あいアイ)
 埼玉県川越市市場北 1-17-3
 TEL / 049-277-7872
<http://ai-ai-art.jp/>





特定非営利活動法人あいアイ
理事長／美術館館長
粟田 千恵子さん
あわた ちえこ

見ること観察することが重要
人は一様ではなく多様な存在

篠崎 障がいのある人たちと他の人たちが一緒に創作活動をしている拠点もあるということですが、そうしている意味を教えてください。

粟田 個人的な意見ですが、特別支援学級に通っている子どもたち自身から見たら、周囲には障がいのある子どもばかりという場合があるわけですね。そうすると、本人も「障がいがある」ということが当たり前だと思ってしまう可能性もあるわけですよ。

篠崎 そうなんですか。

粟田 特別支援学級に通う子どもと普通学級に

通う子どもとが触れ合う機会が少ないこともあって、それが「障がい」に対する理解や認知が進んでいない一因になっているのかもしれないと思っただけです。

入澤 それが、障がいのあるなし、年齢、性別、国籍などの属性に関わらずに、誰でも皆が一緒になって創作活動をやっている理由にもなっているわけですか？

粟田 創作活動でも何でも、「大勢で一緒に何かをやる」にはお互いの個性や特長を理解し合うことが必要になる場面が多いですよ？

篠崎 そう思います。

入澤 大勢で何かをやると、自分以外の周囲の人たちの動向を「見る」とか「観察する」という必要も出て来ると思います。

粟田 例えば、自閉症の子どもの中には「人の顔が描けない」という子がいるんです。その理由は「人の顔を見ることが苦手」だから。観察ができないから描けないんですね。

篠崎 なるほど。

粟田 会話が苦手だという子どもがいるとしても、実は、その子は「喋れない」「会話ができない」のではなく、こちらがその子のことを分かっただけならいいだけなんです。その子の動向を良く観察してあげれば、「何を言いたいのか」「何がしたいのか」を周囲の人も分かってくれられるはずなんです。何事も、「見る」とか「観察する」という所から始まるんだと思います。



NPO 法人あいアイ
東京都北区田端新町 3-36-6
TEL / 03-6807-6622
http://ai-ai.jp/



※編注／記事中の表現は被取材者個人の感想や意見であり、一般財団法人メディアおよび月刊MELDIAの公式見解ではありません。
※取材当日は複数の作家さんたちとお母さんたちにお話しをお聞きしましたが誌面の都合で止む無く割愛させていただきました。(編集部)



絵を描いていることが楽しい 大好きな富士山を描き続ける

——取材の当日、作家さんたち本人とお母さんたちにもお話を伺いました。

篠崎 いつもどんな絵を描いていますか？

伊藤大貴さん(以下、大貴さん) 富士山です。

篠崎 富士山が好きなんですか？

大貴さん 家から富士山が見えるんです。

お母さん うちが川越城址にある「富士見やぐら」の跡地に建つ神社なんです、うちの神社の境内から富士山が見えるんですね。

篠崎 そうでしたか。

お母さん それと、私が山梨県の出身ということもあって、息子は小さい頃から富士山には馴染みがあったんだと思います。

篠崎 ここで大貴さんが創作活動をするのを

お母さんはどう思っていますか？

お母さん 息子は粟田先生か仲間がいないと絵を描かないんです。ここに来ればいろんな題材を出してもらえるので、息子自身もここに通うことをすごく楽しみにしています。

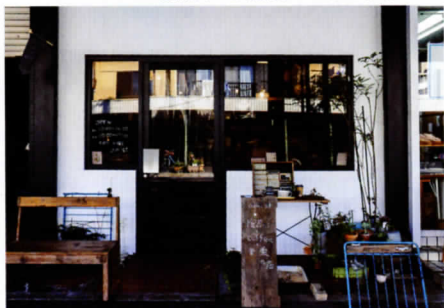
篠崎 絵を描くことは楽しいですか？

大貴さん 絵を描いている時が一番好きです。

篠崎 どの富士山もカラフルで雄大な感じがします。これからも富士山を描きますか？

大貴さん はい！ 富士山が大好きですから。

取材にご協力いただきました！



【取材協力】
雑貨と音楽 amidst
埼玉県川越市霞が関北4-22-14
TEL / 049-211-5633
<https://zakkamist.com/>



※取材にご協力をいただきまして
ありがとうございました (編集部)

新型コロナウイルス感染症に留意し、衛生面には最大限の配慮をしたうえで人的距離を確保して取材を行いました。取材中は適宜に換気を行い、素材写真の撮影時以外は全員がマスクを着用して取材を行いました。(編集部)

取材後記

「あいアイ美術館」の代表である粟田千恵子さんは長年にわたって作家さんたちの創作活動を支援する理由を「絵で自立ができるようにサポートしていきたい」と言いました。

かつて、切り絵画家の宮田雅之さんが命名したという「小さな画伯たち」は粟田さんらと家族の支援、地域の後援を受けて、今では数々の展覧会で受賞や入賞を誇る「若き画伯たち」となりました。

私の出身地でもある埼玉県で創作活動に励む「若き画伯たち」にこれからも注目していきたいと思います。



篠崎彩奈